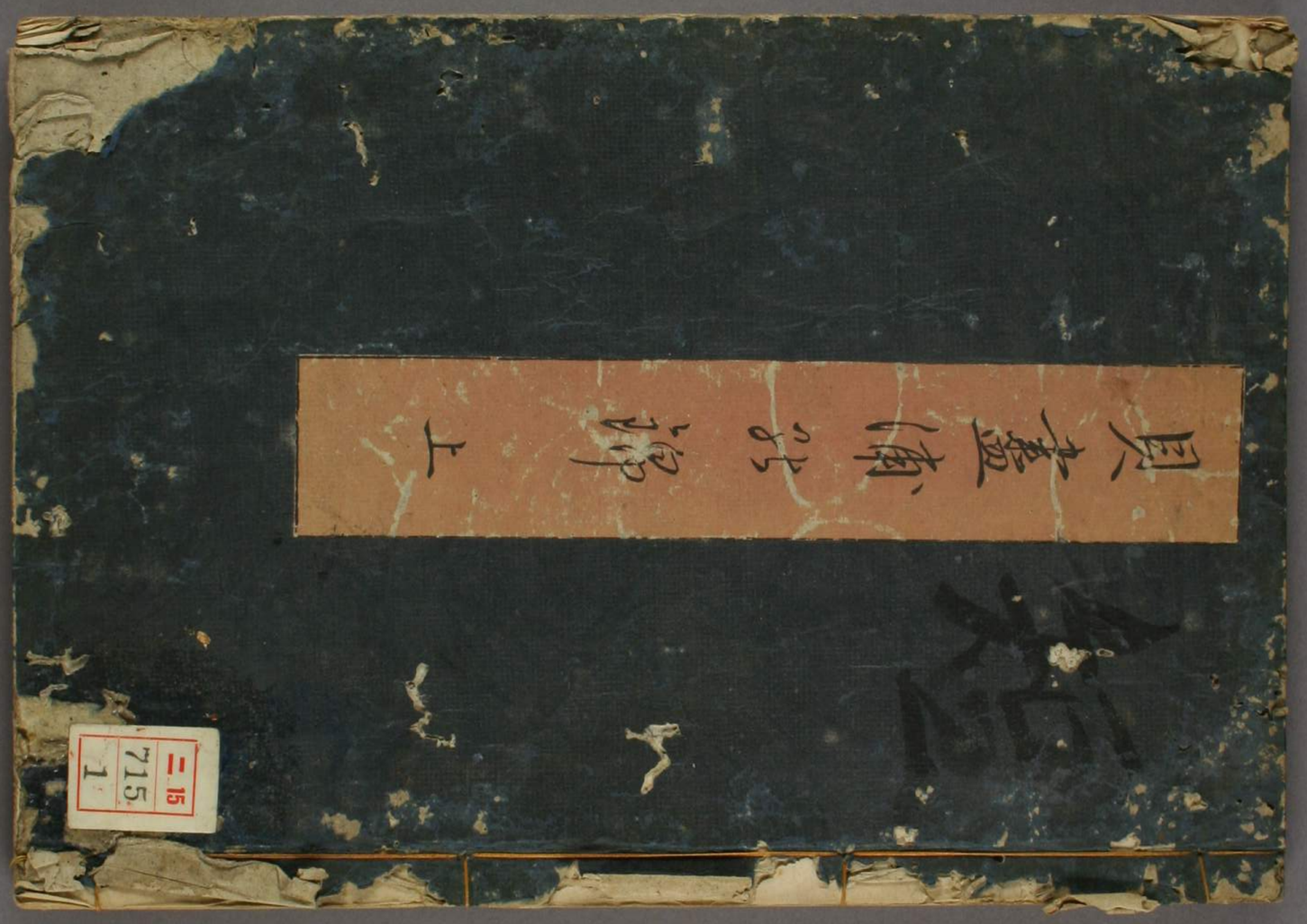

西鶴置土産 上
二 15
715
1

二奴15
勝 7/5
巻 1-3

大枝流芳先生著

貝譜 浦之錦

浪花書林 揚芳堂
稱觥堂 繡梓

蘭氏圖書

貝譜浦之錦小序

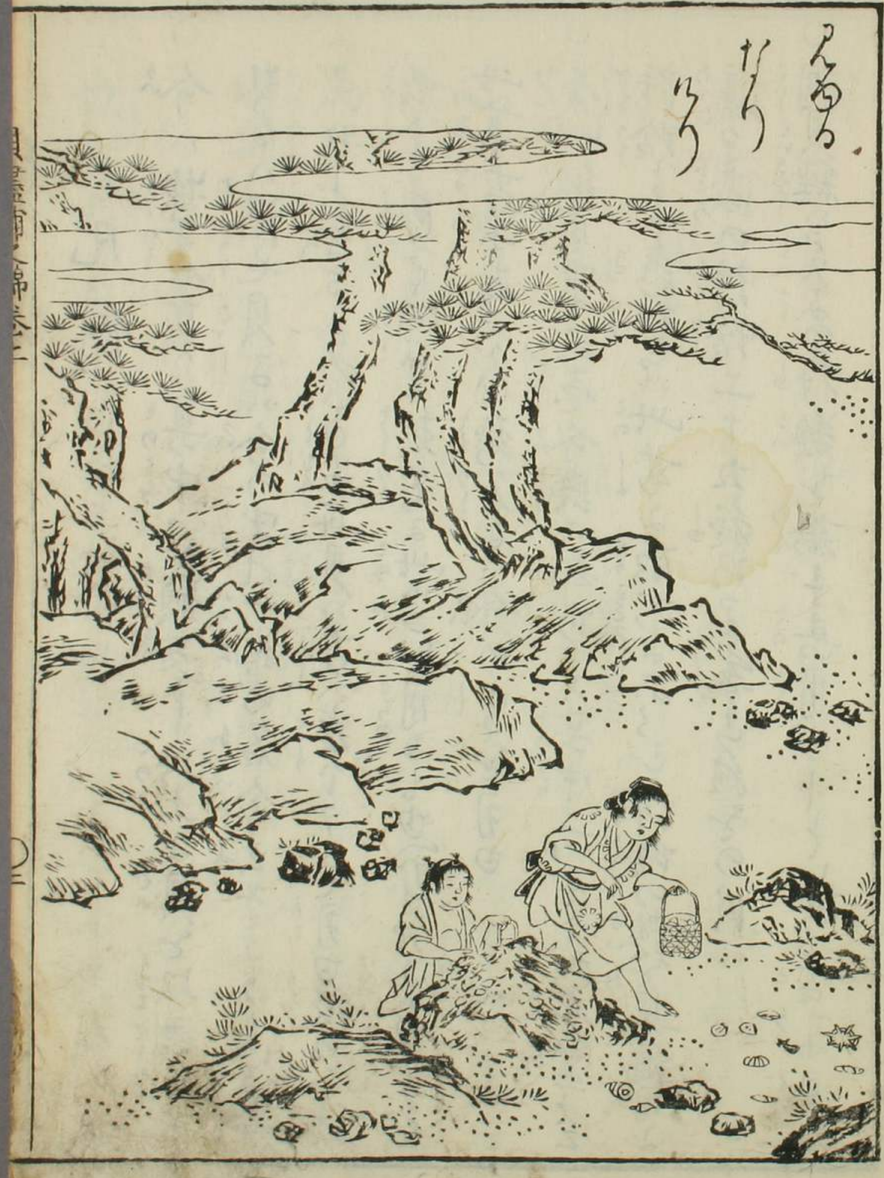
蓼兮斐兮成是貝錦詩ふとうたひ紅葉国古今
みと玉やしら波りん貝や彩ろいんと詠し事昔より
賞翫し事古ふる風れまふ〳〵吹よ行る空方の海も
浪静かふく太こ小敷後乃児女の玩ちりぬ潮れ拾ひ
拾集めて世ものをもけふまく海ぬる浦人り名を問
妙高の人を訪ふ偽を正し古きよまとうを考て
みふふ志る指し事筍ふ紐ゆ歌ね芙蓉を傳て其全
分譜と号し事筍ふ紐ゆ歌ね芙蓉を傳て其全
と歌し小巴の時をやしなふ事と世わりもさ
城ふ志に志る し也

巳己姑洗吉辰

大枝流芳自序

蘭氏圖書

あれ
まだ
色を
ひくし
て
まだ
見い
かすみ
浦
と


春
なり
ける

凡例

○今は惣名なり其中異類多し此土は貝を以惣名とするは誤也貝ほは今の中れ一物の名今云さうがいなど云るをのくるも也此貝は古へ寶として用ゐ諸の今れ也こう因るくけ云は惣名は此字を用るも也かなるはあるもぞ此書古ふさるび惣名は今の字を用ゐ

○本中綱目四十又巻今貴の部内るも其中二つは烏賊亀鱉と云蚌蛤と云巵鱉は此書は取ゆはあるもぞ蚌蛤の類を集綱目は集る處の蚌蛤二十九種内るも委さ称をのは

○桐貝經は貝るの種類を論ぜ其用かしとい〳〵ぞも古来貝を論るゆれ古きの也因てめくらて用ゐ金羊一冊此書は流る

○先輩の今るし言あるるの悪く取捨して

○夫のいを弄るゆ古来は只蛤の大なるを二百六十を集めさまをかぶるは中を絡を以て繻し金銀を点じ五彩の畫をほどこし六角の笥ふ納てさまを含を以て見女の飾とも未をろくの今を海市用ゐる事をもこれ子孫の始れ法ろう大ふ此弄おろうて故部全く時代を賞鑒家古人の貝をよみを命ぜ古ゑ故力集る四条大納言公任の撰ひのは三十六の歌仙の数は配しそたは三十六歌仙今とをしてそやしね

その時分を集るものゝ云るゝ不審なりしかゝ為し因てこゝ後こゝ孫を考て新撰の秘仙介世に行るゝハ後秘仙集序中に入えこゝ若後れ千六介と称ゝ也今按るに後に撰し方を委し取用べし

秘仙介の集撰者れ姓名をもゝるゝ近年四女の著れ上層に合刻して世に行る又偽写の伝多し余別に暑本の写かゝる

○綱目曰蚌與蛤同類而異形長者通曰蚌圓者通曰蛤故蚌從手蛤從合皆象形也後世混稱蚌蛤者非也今世俗にもゝるゝ長を蚌と云ひ圓を蛤と云ひ偏ぐて磨あるを螺と云

又蠃と云又一片を對のものゝ石決明の類也又異形の類を今蚌蛤螺を對異形の五品をわけ記す又一種貝れ類を合て六品なり

○今又五十四種の源氏貝あるを是を要の帖教に配し名を命ずるものゝ又淡古產又百貝に小倉の山荘れ百首に配とはし又之を後世古より何きの介を以五十四帖に配し百首の歌に配もる定例に又十四色百色を集く只を教にこゝるのゝ歌紀介れどゝ定まるゝ因て秘紀を以寿貝の書を志し家紀貝に古家れきよりゝ好介し撰きに撰べき介に秘ゝ撰べる今余五十四種撰て源氏の帖教に為る源氏介と

云るハ後京仙の序中より又えらう

○今の衆類甚多し耳目の及ぶ所採摭もとゝいへども委天下の地

あるべきよあらば後の博雅の人を待のみ

○今の名實あらはしそ侮でもとゝ数ハ邦に於て天下古今通用の名を撰

の今より至てハ名一聚なら後多く雷同と又一物中変化の原莫可名狀

後の人強て名を命ぜ方言俗称の特名を悉及ハ集といへ

是又あるべからざるもの漢名ハ云に不及和名なりとも三き名と定

俗称異名混同しく咲ものハ其下に附し歌名形狀名産ハ出不出分を注

○前後の部紀今二組ハ部并に圖ハ圖ハ此書附録して余別に

さめば只名目を載て雷同の評を華ず

貝盡浦乃錦巻上

目録

諸説

和歌れ浦真圖

歌仙貝遺漏百餘品

住吉浦潮干の圖

前歌仙貝三十六品評

但馬竹野浦真圖

後歌仙貝三十六品評

源氏分配當用録
新撰六歌仙分

貝盡浦之錦上

緒説

分ハ艶光あるて大なるもの色分明ふ白きもの潔白よ
赤とれハ深紅ふ斑文あるものハ花ざやのなるをよしとす蚌蛤乃
類お食するものハ片おあしてハ不離なるをよしとす
又歌舞の分ハ小く小き米粒のごとくもるふようなるを五尚義
十尚義れ大さも大ハ〳〵只鷲卵の大さ程ごとくなるを
のなるをとる重〳〵き陰生質大なる分ハ生得小なる分ハ
小ハるハ大なるんを攫ひ大ハるハ小ハるを害とる事ふ
集てもを形大やうをもとをよしとも云得かゝ

神谷ハ雅號の谷れ王なり法方ふかのきども丹後但馬乃
海邊ふ出るものよりもくいれし紀州ふいかくたまくある
ものいきも色りしくけ谷をなでしこと谷とも云なを
なでしことを云べき谷なれども支くい別物なり
きべ多ハ好谷ハ去多くよりの岩多き海ハ小谷ハいきもく
れし細砂のあり紀海よりも播津ハ海多くハ出るく
内海多きハ好谷れし
紀州和歌浦荒濱加太の栗落れ北濱皆ふ至り足形よ
谷多し泉州の海邊ハ好谷なし但州竹野浦好谷
多し丹後宮敷濱琴浦濱ゆとよ紀谷あるよし余ハ

至りぶ拾ひしへよりひし形り紀州熊野ふを好谷
あれよりをひんしなりを隆寺方ふハ孫し紀谷も
好谷もあるべきなれども余も至りど約しへを拾ひ
あるざきばもりず
相州藤倉雪の下れよび江のしまれかりふ谷
貴家多くきべくけ地ハはむうしよりとよき
谷あきりとり
寶永正德の比紀州和歌よ至り又今年至る廿隆年
色ぬきバ拙多くこの八好谷の名おふ守しと遠ひしこの
多し近来い文華さんみりく世よ多く谷をとてきやはよ

より浦人多く集て南ふお新仙よりて名を呼新仙より
そそのハ赤ふく付し名多くきと又へて粧なるべ
但州小至乾付或人乃拾貝と云人あるとく
詩歌の海色を彩御して今を云ひて歌より物伝
御しなり移し九粧人乃り世癖の膏肓よ入しく人
なるべし但州も来るよしやしなり
海ハ朝日より十又日を潮色るみより今ねやを
下ナ又日ハ歌ゲ色ハ今なきバ今拾かさし海ハ多く色を
乾より日中色の間ゲよし晩方ハ多く汐ふ今ふより
二月二日ハ大潮乾るより竹の車渠今の下まも又へきと

昆布ハ世ふ知るとく大汐の乾る日より此日別しく今類
多くねやを
慎懋官ゲ花木考小螺多種掩白而香者曰香螺殼尖長
者曰鑽螺味次之有刺曰刺螺其味辛曰辣螺有曰拳螺斂
螺斑螺丁螺云くハ多ふく螺の乾出くみゲくをりみなどの
ろちよくちまろ

妹背山
塩浜
高松

和歌の浦の風景
布引松
塩浜
妙見山
天神社
東照宮
和歌町
出浦

歌仙介貴遺漏名介百餘品

鮑介

蚌類　鮑の羽ばたく地色赤くかし褐色紫この斑文鮑の生ずべし蔵きいし和名抄の海辺もあれども色悪し

柔年花介　和名抄の名

螺類　形男しよ細長くすくち色あさゞの玉乃ごゝ世云和平色也紅色玉如介なり和名抄より出る玉稀なり

拳螺云類なり　本艸云青螺色如翡翠

紋螺介　和名抄の名

蚌類　地白く紅の色てまだらわざやうなるなりやありてきさいなり多くいなゞくし和名抄より出る

月日介　嶺表録異記号海鏡

蛤類　うすく丸し片方赤く片方白し周く月日乃名目あるを大なるを多くかきをの鮮し和名抄に蛤蜊より多るよし

叶浦よ船し絶而より多るよし

羽子介　和名抄の名百貝圖云羽貝と云

蚌類　潔白なりうく落しうるのねれ形のごとし個州よ

多しわかめをけり

海雲介　和名抄の名

蚌類　さま形多くれど　殊に扇あるを尾の名に称ひぐ
色白しけやなし　紫づくしもの貝なり　わかより出る
葵貝　百貝圖に海馬家と云

螺類　大なるもの多し　ふきもの多く稀に小も麓に二粒
の大さ形り　和名ふしたこ　あしひれ　葵のとくもでなるよう
名をもて白くかうす　美の新蔵くまれ市もて
本艸云鮑魚螺と云ものは　葵貝の類も多ふ鮑と云り

章擧貝

螺類　色白し　光かしうもて　葵貝の螺分と云なり　面白分なり
かやくれ形多り　是も鮑螺の類なり

駒が爪　和名浦の名

蛤類　色白く褐色の斑紋ありてよもてぬくく入る
昔は和名の浦ふて秋伯の中の蜜貝を
こ国が爪とえり人々はもうしび貝を云也

鮑の爪　和名浦の名又はるのもとと云ものり
百貝圖に勢ト云

異類　さまはかはかふのる龍蜘なり岩ふ付て海俗称
ちいと云大和名草ふ　とえてくり龍のまとも云形り
のくりやるもれなり加たよ多し
めくはじや　三才圖會云江橈又号指甲螺

蚌類　長さ七八分牛　たいらげよ似くり色まるく扁し
備前牛窓ふ多し　ふよはる稀なり

胡㩜介 和名甫の名 百貝圖ニ云 玉貝ハ眞珠是ニアリ

蛤類 内あわびのごとくえりかたくくらとを白く黒多

瑰点ノ如き形胡㩜のごとく百白き介なり

蜜介 和名甫の名 百貝圖ニ所圖ノモノハ黒ミ

螺類 俗称かんぐらと云ふ口くちいさく内あわびのごとく

光あると云ふ小ハ黒くあり拳螺の類なり

延介 和名ひしの名

螺類 むしろを織ごとく縫ふかぬ筋ありて地色

白く褐色の瑰点ノ如き瑰螺の類なり

山多介 和名かしの名

螺類 かしらを出てなり横よ薄く筋ありて地白く山多の

おとくなる色の瑰紋ありて瑰螺の類なり

蘭

蛤類 あさりはまぐり小介ありて地白きやゝ中さたの

ちりまぶてたやゝ栗貝ちりあつ

香蛤介

異類 色ハ海栗のごとく尖ハ中の肉海鰻ノ如く和名甫名を今下

ごとくいがあり色黄蛤ノ如き栗の

ごとくいがあり色黄蛤ノ如き栗の

ごとくいがあり色黄蛤ノ如き栗の

海燕貝

百貝圖 総角 參望貝ト云

異類 ちまきいいたこの殼なり竹原始小圖の網目のせさう大和なる竹みをとりけるに附ハとみちのをくにてとゝ肉去て殼をむいてくれくの數なりけるとまかでとゝ云殼をきりやくかと呼おりて表ふ地ちやくの元をゞ紅彩和せ合がごとくにあきをのく接ふ紅清みをと多くに異物なり

芸介

和名抄しの名 百貝圖三飯櫃貝ト云

蛤類 小黄ふく肉芸形ゝ竹云芸貝よりなりて又一種中の辰ゝ細さきぎなりて小児おもりぬきばさられどくなり形ゝ表ゝ地白小芸の紋ゝよりり芸介と云なり後ふ絵ゝ

入形芸介是ゝ寄ゝ家ゝ云芸介ハ始ゝ云芸介ゝ又いゝ芸ゝ云

形蠣

和名抄の名 百貝圖三姫貝ト云

蛤類 ふ仙の中ふ入ちぐ紙介いあくめなり接ゝちぐきあハすゞくるくあり山ひめちぐれいちぐれくそぐゝやくふちじのどくなるものなて小介なり芸ゝよくやさし紙介なり

甲介

うにつぎ うにのを 百貝圖三霊蠃子氏云

異類 かゞゞ介の下ふ弁ちぐゞし海栗の殼ゝ白きまちきあり甲ち芸のだゝ紙芸形の異物なり大小数種なり

蠣介

和名抄の名

蛤類 かゝ色て形ゝくゝ色褐ゝなり小介ゝ名仙つね介形ゝ

筍介 和名の名又ゝ〜し 百貝圖に籠貝と

螺類 さゝけのこれどくさきたそぐり色〜いろハ褐色のさゝ
くるぐさくしたてさゝぐ〜ハのもむ〜い和名浦みしそ〜しと云ま
辺ゝたけのこ介と云ゝしい雑ゝ似るふよりて若と鎖螺の類し

松虫介 和名の名

螺類 色まつ虫れどくたてさゝぐ〜ハのゝ横みすぐあり
艶もハのゝくよりた介形ゝ

牛蛇角介

異類 ゝしの角れどゝ〜ふゝれ方のこぐちふ口ハの紀州
漆戸より出る細長ふも稀ゝあゝ色白〜又うゝと褐ゝをゝ

異物なきどもいやし〜ゝの〜ゝ介なりたてさゝぐ〜ハの

玉椿介 和名の名又白椿介とも云

蛤類 雪白白玉椿の葩一川蔦〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ

丸く〜て赤ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ

糸の巻介 和名の名 百貝圖に捻貝と云

螺類 色白くさゝぐ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ

白くがゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ

酢介

麝也 さゝ螺類の介の麝なるゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ

あゝ血ゝ破ゝと入ゝるてハ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ

さゝ〻ハ潟ごとと云て本艸ニ云郎君子相思子是なり

き梨ゝ〻

毫觜類 白きふ〻ゝ形ゝ落く強ちしのごとし片方ゝ〻

綜角〻

異類 ちさやゝ〻の久〻くされくく〻おちてとうあつと

しを云なり又ハよ花れどく刻くなせるがごとし異類也

曲〻 大和本艸の名 和あめいおや〻と云 百貝圖ニ濱苔ト云

異類 本艸ふの〻石蛇形ゝ由ごるまく蛇のごとし多い

形尾なり〻稀ゝ尾の方ゝもあり異類なるもごと多くあり

又ゆくゝの美なるもゝの〻者のハ各白しゆしまきあるもを

くどや〻 和ゝ浦の名

毫觜類 是いよめれきかしこ〻の類なりくどゝ家を葺るゝ

似ゝ色ゝを白く又嵐を白ゝ面白きものく縱横ふ

きゝ〻ゝなり

舟〻 和ゝ浦の名 百貝圖ニハ松貝ゝ多須貝ト云

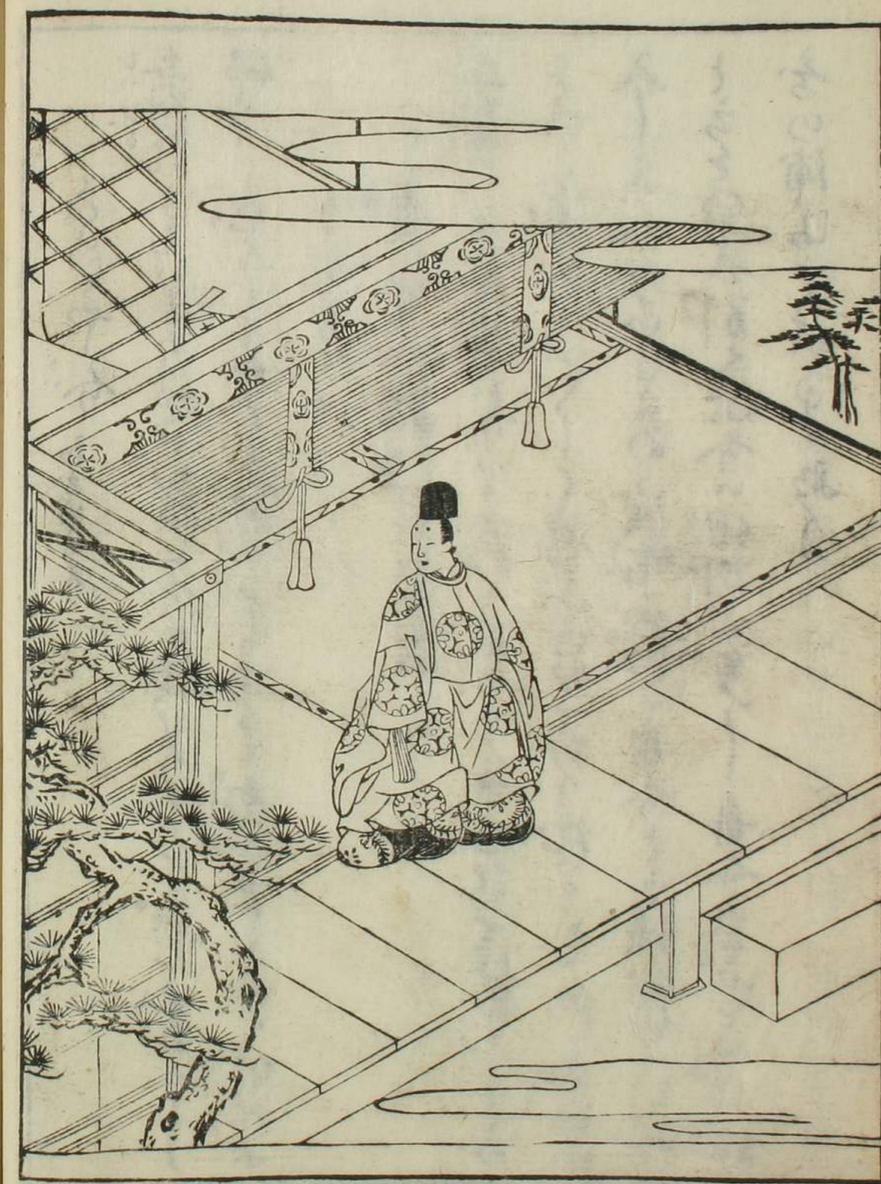
毫觜類 是も同類ゆく落くわさ〻中小なるほどごくの

ものゝ形あゝ〻く褐色のかくゝ地いゝを白しゝ紙ふ

入〻舟〻ハ是よあゝ〻紙ゝ舟〻と云浅ゝ紙よいろ〻

とゝものとハ別ゝ〻ハ〻ハ組別よ多〻舟〻の名と呼ハ和

ゝの浦ゝくれゆ形ゝ



蜻蛉介　和名浦の名

螺類　出てふく庭そぐりから尾同じぬとさん艶よし

地うもかきゆし細き白き罩の内ゆき介こゆるなり

和名の浦よりの

巻貝介　和名浦の名

螺類　出てなり赤るもでこるくまた巻のざとしさたこのる

色うもとかき色赤り

蒲萄介

貝類　貝子の小きうすたとのこぬどこのあうく熟せし

どくもたぬく小介ふくもはしたる介なり

貝子　たうこい　黄貝ともこう　百貝の圖はええう

是い古へ寶とこうこう文易ふ用しものなりも要ハ貝紐

なり中ふ又えこう猪世ふ紐きく貝子もとるとえ天竺ふし也貝へと

きこう碁石ぜとしてかう考やこぶと云こ諸のやこよ用也と

なるも色いいろくなり東海夫人の類し婦人産もとるふるよ

ここもいハ安産もると云ふ国てこやもこがいこ産ども此説

な等よハ皮し世土の俗説なこう伝ふこもよ多くなり

白子だこ　和名浦の名　百貝圖ニハヅベタ介を白子だこと云ハ誤し

螺類　色白く細くなりこもこで横よ入出て赤る介なり

多くハ赤し此名志雅なこうぜ別り名をあべきものく

[illegible]

孔雀介 異名し

蚌類　みるかいかうとかいのまきをわかあ浦みるくいみかう

ようぞろかなきと吐擦なる名かう

まるみかい

螺類　ひるくるくる色いろいろのまきまごもこ云小四人条ま

[illegible]

[illegible]

車介　和名あしの名　百貝圖ニたとき貝と云

螺類　ふきもまるくみの類あし色わう黄なう裏の中ま穴を

うつべし又きバ車ぬぐるくるくる用て此名を呼とうえうう

刀介　和名あしの名

蚌類　見かまるまる云馬刀なるべし馬刀をまてと和訓とるハ

非なりまてハ蟶なり此介ぶうるくるくるみ白く褐色乃擬

点の里介なるべど蔦しやうげの類あり

石亀介　和名浦の名　百貝圖ニ蝦貝と云

螺類　こまき先ふのまるかる貝の類あるく大なう俗称かんぐろと

云ものく赤と黒との紋交りて石だたこのこあくれどくしまきふ

よるまるく名とるる歟

釜介　和名浦の名

螺類　口大きして冷のごとしかあるく横節なる中貝なり
よもたるものあいなるべし

狐介　二種有　百貝圖ニ丸キ方ヲ文殊貝ト云
又色黒クコキヲ油貝ト云

蛤類　二種なるに一種いろ色狐いろなるより名とする説
近江和布浦なし云狐介はかしこ出てなる姫なれ介よりてふ
節ふくく入色うもかきうもなりうさきをきたる介と云説

唱戸法螺介　和布浦の名

螺類　丸きやうなる介角ありてまかり隠類なり
あるのかをりへ恋しい和しし

蕃介　二種　百貝圖ニなでめの方を羽貝と云

一種は蚌類　小さな介の形小似く大介なりたるものごとく
節高くうもうを白く書きうつるまりかき介なり
一種は螺類　ぬるれる白き介なし縦横小節なりてふしこれい
和布浦なし云名く拾ども赤の方形状蕃ふよく似うはは似つだ

漣介　百貝圖ニ食貝猶貝ト云

蚌類　白く横長く横小なるもどく節るくむくく入蕩き
介なり中介小介なる河辺

千歳介　和布浦の名

螺類　小介なし地くもと黄小く褐色の横節を地あるべ光み
ざんちく介　和布浦の名

螺類　みじかく太く褶さし間しに色あしたよりて紋さ紋分ふいれど

蛤類　**淑吹分**　お仙に入　百貝圖にくかの貝ともいへる

　　お仙の中まもとを云又本分ハ別なり

　　がうか

螺類　まきハ古名なり昔より名と呼分し出くトかしそぐり

　　ふくれけるる分ハいやしくて面もうつ物をのこ大和なまる

　　ろうざいと云ものなり

蛤類　**朝分**

　　後お仙に入若分なり白くまぢ云くえかぬ物もの

　　まころれぐ〳〵これを若分と云ハ誤なるべ〳〵

蛤類　**千色分**　和布浦の名　お仙に入

　　かし地分を云

螺類　**玉分**　異名し　お仙に入

　　俗称ばべつ　お仙に入

　　まるく滑なり多き分ハうつもの地色

螺類　**やしろ分**　異名和布こ云なり　お仙へ

　　俗称うづ分後お仙に入れ世貝ハ

　　八鬼分　百貝圖云片部貝角片部ヒ云或ハ雲貝ともいふ

螺類　ふしげるやしなり形和ふ負なりあらくれ

　　分なる地白くまのかとうの角ちうさ〳〵の類ハ下品

山椒介

螺類　大さはんせうのごとしいろも赤く乾山椒のごとし　大和なまつとゝへらう豊前國藍濱より出る細川三斛子名と付のよしとゝ云り和名抄に云るのいはゆる余甘あり甘きものを

[illegible]さきやしやなる介めり

[illegible]介　和名抄にの名　百貝圖にも同名

蛤類　梅れ花介の大なると和名浦ふく捲介と云

長幸螺　百貝圖に香螺長螺よなき貝とも云

螺類　なゞ紀ふ[illegible]ゆかしらくちびしのごとく也く縦横筋いろと地うを白くかし褐色のこれ[illegible]

磯介　二種

一種ハ手附　お奇細よ入佐称よめがさゝ　大和本草に曰よめがかさ和名抄に紅皿とも云ものめり

一種ハ螺類　がんゞゝと佐ふ云ものは云和名抄

かもう介

螺類　出てなる中貝なるい詩おろうんのごとくにてゆ小蘇入けやわらとかき介なりけり

笹れ蟹　一名亀介とも云和名浦の名

異類　白く落き小介　光えあり蛇のかゞちよ似るうむし和名抄く蛇介と云ものと今いさゝの者とゝ云

紅葉介　異名ハ紅葉貝　馬のくびとも　百貝圖ニ片貝

無對類　おお仙よ入かゝ〜介を云よあがさらの類なり

とみぢのふれゝと〜　閨書云石磷形如蓋笠殼上肉下ハ介なるへし

伊豫簑　和名浦の名

蚌類　浦お仙よ入あ〜ういと云

口切介　和名浦の名

螺類　竹ゝ介のふとゝを云和名あしの名

筍介　筍介とハ殼く別種也

桜介

貝類　貝ゝれ片方より巻返しゝくゝあしあ方角のゝと

くゝ巻るものを織　ひのゝとゝ色いろをかきいろなり

猿のかゝら　和名浦あしの名

蛤類　かゝ云魁蛤の小きを云あゝ介のふきなりさるぼゝ

も俗ふ云なり

玉敷介　和名浦あしの名　百貝圖ニ合貝ト云

螺類　あゝまゝ巻のゝとく巻しくたちてゆゝふくれる方の

螺類　大和なゝ巻螺と云ハ是なり

夏桃介　和名あしの名

螺類　たゝしのやゝ巻るゝもゝ巻く或いゝもかたちゆく

巻なりゝもゝ貝なり此名俗付ぬゝなり

かや介　和名あしの名

螺類　厚き物なり艶有る地うと白くかきの殻点有て
うつくしく和名抄にうぶ清なり
女郎花　和名抄に茶碗貝と云
蛤類　形も色も牡蠣に似て大小多し
和名浦にく茶碗貝と云い大なる俗名し
岩海蠃
螺類　是小巴のまいもどいよ志節の紋ありと云色かきと形
編笠貝
異類　さいきは和名にく名付しものなり形似るよりて
然ども貝の数も又えび石蕗石花の類中し異物なり色ふし

肉よ和名抄にうのやうなる物き節立なり志異物し
岩章螺
螺類　ぶいくく数てきるいぢが多し色ふしよりぬ分し
婆路貝　和名抄の名
螺類　形状曲がりくねれば尾をしぼりしいうもかきなり
蓋蓋貝　百貝圖に賀貴貝と云
異類　こまい貝ともえびに異物のやうなるものなて又魚拓ふも
あくびまかでの類くこやくがはなどくく色白し曲まあくぐれで
尾ぐし和名の浦より出る二月よりう中の内と去あるひ〻きてるし
尾形貝　百貝圖に高貝と云

螺類　艶光ありてなめらかなる中分なり小分小なし表淡かて黛ぐ
ごとくなる又潔白なる大分なりてえんすなる分なり稀よみさとのし

細分

異類　色づくしたるなり色濃紫あみのごとくさらしなるを
竹野浦小出る稀よ白きとのなるを金き分とえび多く彼く
あり大なるいく拙なり

巻貝

螺類　白く滑なるかしも出てなり稀よりなり大小ともよみを

鶴分　和泉浦の名

貝形　片方よりまたも小分なり白く薄し和泉小竹野浦もを

貝形　さきはひし分のあるを小出し角ぬきさとのなりうらいこ
さぬつくぬぐし分圓形なる稀なり

澄分

蚌類　厚く白きさるのあぐきのぐし　前名紀ノ見を横分
しなる名付入しいれそくくいは強めるべし

烏帽子分　百貝圖三仏貝又烏仏住ニ

蛤類　白き中貝えぐしのごとし竹野浦よ多みさぐしよ
えり付あり多り

萩の露

螺類　出てゆく白き地に雲のかゝる様なれども花もなてなるべしかなる小介ゆゑ名もあるべし

苔衣

毒對類　うすく色うすく如絲介の類

白米

螺類　まるく介の小貝に白きを云赤をもすか介と云

形もまるく米のごとし　闘書曰米螺小粒如米云べし

雪雀　百貝八圖ニ傘貝ト云

毒對類　雀介よりすこしひくく梅花介よりは出て雀介の

ごとくもまだ色濃白なり小介なり

要介

毒對類　扇の要に似る介也色赤黒し小介に褶有介

閑守

螺類　たてふのごとく筋ある白き出てなる介こいとのけよ

似て別なり

紅嬰欽香

毒對類　あいだ介の形もくかゝ色なり小介こうもく

内も紅色なれども外よりは暗し　竹蟹より出海

蒸搗

蚌類　蛤介の形乃やくふり色まるくして多くハ白く

きびてあうようぬ貝かうぬ浦みく是といひとも云

八重梅 わかめくハ友の梅と云

蛤類 梅の花今れぬくらべうるたとのとも冠(つぶ)の形(なり)

桂今

玉對類 あつく白きふめくの紅のうつるかさちれ

雪雀ふ似てきぐ

雪家今

蛤類 白く細横よ筋細くえとも貝よ似て別なり

蟬の羽

蟹類 しやかいとのくふさなるべしうすく光ひやわとく

せみの羽ふきぬくこち形ハ畧ぬくでい歯くぐ

茂壺 俗称でんが今

異類 石ふ付くくみ肉なれハ落てもみく

ふく弱よ穴あり下ハ底のあるも有又なさもみく色和式

えようきくくさ多今し

塩風今 百貝圖ニあぢ壺ともよ烏帽子貝と云

異類 形ぬぢ比ばよ似くえ祝ぐみ色みくたてきぐみ

ようくなるとのえ多くくみ矢拭ようく弱よ穴あり

底いいけきもぬきくまこぐちとえ

松風

蚌類　色白くして横よ細くこはるよ筋ありて和名浦よみ

薄さ介なり

薄雲

蚌類　かし厚し地白くちらくとかし黒き斑点あり

鶯介　百貝圖よハ色と孔雀貝と云

蚌類　ゑ貝の色白黒なりと云

巻貝介　又九貝介と云

螺類　稀ちるとくの白色にて殼介し稀よりあり

椎の實

螺類　みどりくろし白きよりかきの斑点ありて椎乃實の

だとくしてもべるよ似たり　拳螺類なり

花笠　是神ゑ祭る八鬼介と同物歟

螺類　角ありてものなり　かし横ゑくるれ異形なる介なり

ちぶあくく白くくらとくるさなり

玉蕾

蚌類　たてよ淡く筋ありて白し中介あく小さハ稀なり

巾着介

蛤類　さんちやくのごとし色赤黒くいろ介のみなり方

二ツ合せるるごとくしぬ白れる見なり

枕介　二種ゑ

螺類　みな〻貝の類なれども形文のみ一種ハ余他の中よりあらし軒類なり

惡鬼介　百貝圖に百鬼貝遷貝とも云

螺類　そう多く小介なれ縮なるものゝ色白し殼

菊けやきよりも色黑ふもそう多くまた刺塊の類なるべし

腰高　百貝圖に盲貝と云なり

螺類　うらあり仙て鮑にのゝね介形ハ俗よりこれを

がんぐるゝと品し

鬼茶碗　百貝圖に天狗貝と云なり

螺類　角多くあり紀介なり小介より形し下品なり

生蠟　百貝圖に玉琲貝とも云

軒類　大小数種あり小さいもとくはなし和名より小介みせる

合形小さるものゝ多くそれ形人多くもれるごとし

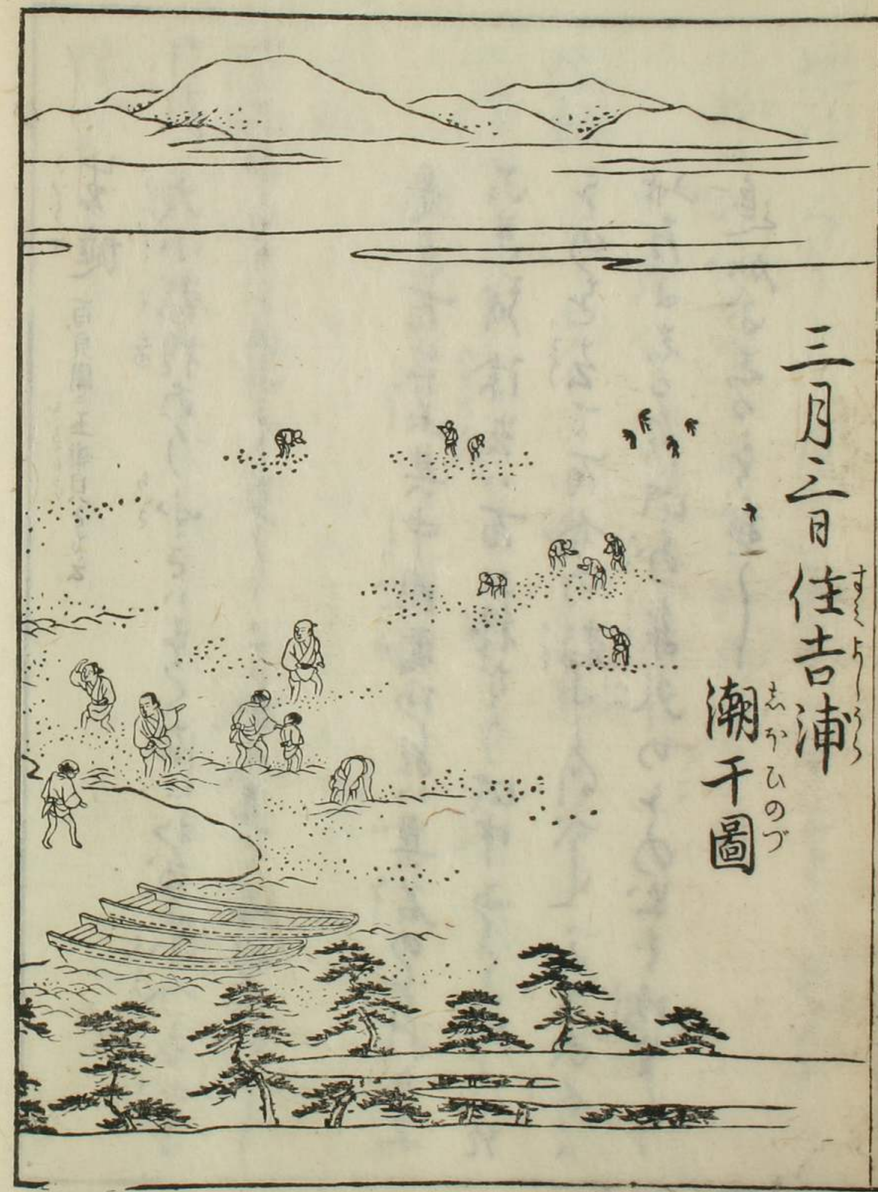
是を百十石其中圏圍の形ハ異名のもれ九形

出き城除去バ百二種なり此中みな得ざる

そのを去て百介の数ふ可べし之十六介ハ

世たよりまるに此形

追加ふまるもゝ也



三月之目 住吉浦

潮干圖

前歌仙今三十六品評

篤今　左一

軒類　小きなめし大なるハ多し大小色くみく紀貫吹上乃
濱と云者是ハ白き色ゆく横よりるくふとく筋立陸奥の国
あくめ河つよ紀今こ上品　舊説の歌ハ今変よ云ことのおいあくび河州より出
篤今よ似くこ上品なて上品なし横もとのこ

忘今　右一

恰類　こいぬくさつよ筋細くふく入ぬ如き今りよ似く
別こ上品紀ハ横もくく横よ小筋ハ紋ハ是こさいろくみ
梅花今　左二

恰類　白く広やな横よ細く筋立こ今ハ中ゆと梅花乃
一辨高くるおこ中今ハ小ハ中ゆぎ是ことの多し八重梅ハ者種あど
まもなくこ此今の大るをわお俗ゆし続今と云

櫻今　右二

軒類　中今あよ所せ　おとくあづこ今を橫今と名付入ふ
巡くハ浦なるべ橫今ハ薄く赤き今こ舊説の歌ハ浦ど
片今　左三

無對類　これとみば見へと云ことのなりよわがさらのことぢ
れぐとくなりこるを云是又団類別種なり

石変明　右三

無對類　世よまるごとし女性みを出るうふきとの稚れり

蕊介　左四

蛤類　蕊ういハ此おゆ紙ふ入ハ和おゆく云なりくも紀貝入れるも

右よ云裏蕊と云介なり後おゆ紙よ云蕊介ハさくら貝と云

をゆし唇ふさくらゆて地ゆく密のかたうみ時方介ハ尺ゆはしてよし

後おゆ紙の方見なるべし女性よ云蕊貝ハ又貝なの形ゆく別地れり

白介　左五

蛤彩　此おゆ紙ふ入ハ白ゆ介なり後おゆ紙よ入る白介ハ

別なりもゆ介を後おゆ紙よ花介と云ハ為くへ誤るべし

蛤介　左五

蜆介　左五

右ゆ介ハあゆ介ハあゆくく世ふまるごとし二殼ゆ介なり殼ゆくく白

介なれども古ゆふよゆ異しゆて紙の殼よ入しゆべし

海介　左六

蛙彩　いふをとくくゆ蕊ゆ介なり蟹よ似て小し大なる

とゆれなりしてゆやゆ

蟹介　左六

蛙彩　世ふまるごとし小きとゆハかし馬刀とまれと刻ゆる誤く

花介　左七

蛤彩　見ハ橘介と云とゆゆ花ハとも云べきとゆなり

赤くうるをき分なり横ふきと色分と云ふきを横分よ
そちづへ人あり図類ゆゑ別種し付お紙よ花分とそう

曜麦分　右七　百貝圖海菊云

輪類　色濃紅ゆしなきもの大なるハ色あ小き径をう
巾分いとうよくやはきも見く紅分と云人も有り袖分をなで
しこと見し人もゆ後ゆ紙よハ錦分をなでこと云いづ
きろ是なるゆをもつ海分よハ又色をみる錦ともこれ
よハ赤のゆゑ見ゆて按バ巾摺ふ入方なでこるべ後ゆ紙ハ浜ゆ

空背分　左八　百貝圖ハ甲貝と云又ハなでこと云

螺類　巾摺よハ背べ分ゆを云後ゆ紙よハうづ貝を云和ゆて
云とのハ又別こと稱ゆ小ゆ背べ見なるゆをもつ巾摺よハ
うれせ分ハ和ゆて巾ハ玉分と云又古来ゆ伝よハ肉べく
肉のなきをうつせ分と云ゆ又ハ云ふうきゆ巾ゆ紙分
入ハづ分ゆ分こと稱ゆ和ゆ見光又ハ光螺と云ものゆ

袖分　左八

螺類　巾ゆ紙よ入ハ小き分ゆ皆くこいきのあるのやうゆ
をやうゆそで見こ又一種和ゆ云とのハ別なり螺ゆて
口の方袖ゆ長く出しを云大なるを俗よ海つゆ分と云をの

船分　左九　百貝圖ニ猿頭云

鮮類　叶擬ふ入る紙今と又和名浦かく云紙今とちがふかく
形狀文よつしくがしは也又ちがしとものよりかれどもとけがとし

蜜今　右九

毛對形　ちまい昔和名かくこはぐ爪と云しものこ今い是さわ名
かくもあま今と云厚き貝し地淡黑く白紋又ちよ紀今なり

浦打今　五十

螺類　是い和名一つ古くとて細るとのなり甚きとうハ
ちがふ大きく或い小くさろ紙今りかし和名かくあを白し
黑くうくあをなりうらうべのごとく細き節なり

磯今　右十

毛對形　ちまいよあの皿よあれかさ又いだにさらなど云俗称み
一種いて貝と唱るものハ百貝の中よ奇ごとし

佐多形　五十

螺形　世ふ多くもるごとし小きものかし爪さるべて
又一種和名ハ俗よハさびいと云なり

千種今　右十一　百貝圖ニハ白黑く彩色ちう　かくみもるを

螺類　下ちがう形きうるやう小ちはう色こく紫ちびと云
ちれどとし小和名くこちもくなし

狗あら今　五十二　百貝圖ニ空蟬貝と云

螺形　色白くはやちされとものハはやぬけちどこ立ぬるハ

丸しき形なるもの

津今 左十二

螺類 殼あり今よりてふくきうちのうち地白く

褐色 殼文かくのごと

烏今 左十三

蚌類 形石貝今小回しく色黑し白きよ褐色のすう

あるとを石貝と云又ありいろよりを當今と云なり皆

同殼ふくの色のいろふくの各ハ形

雀今 右十三

毛對類 石よ今立付ハ内なるハ砂中よりの色うと

白さも又赤かさ色よこと紀も二種あり又鬱白ふて背ひく

ささのを雀と云かさちは雀よ似うう多くある今ようう

都今 左十四

螺類 からよ似ううを赤きの地よこく縞をかいがくみ

桜尾螺 右十四

螺類 中まふ出ようう又法螺とも半なり 形狀世よ

さとし小さとのあし

車渠 左十五

蛤類 俗ふまやくし貝とく大なるとを扱ふよ用ひるとの

なりの如さいうもく美ふあり世よ多くこるとし

かゝて貝とも云又海扇とも云多き分なり文蛤貝と手ハ
大なる徧なり

色分 右十五

蛤類 此撰ハ入色分の圖もるとがゝしなぞしこ分りを
色分ゝと云撰貝への出てなるも色赤さふゝ色分るも
云あるも此舊本の品乃やゝ拾る貝ハもゝびれもゝく多
半徧ゝなるべし 按よなでしこ分小蛤分を間きば此
色分ハ丸きもの多でしこ分なるべき歟

破分 左十六

いたゞきの分あゝも破るを云なり此撰もろく古あゝと水ゝ
かやゝのやゝさいもなゝさとめを入そう

痂分 右十六

是も痂あ多貝を見べく云ども曷よハ螺の類ゆゝく出て
なるゝ痂つゝさもんの出る城圖せり

小分 左十七

もゝ毛ゝこ毛のゝさ分を云り

真蕪粉分 右十七

螺類 大なる茶柱のゝゝ色ゆゝ蕪ゆゝ濃る
やゝなるゝ毛ゝ名付ゝとゝ人之きゝすべて小分ゝ大なる
ハゝ白ゝとゝゝ浸ゝ仙ゝ入る美ゝちゝ分

是とハ大よ別なり

浪間拍子　左十八

蛤類　ふさ〻含しハかしゝ　ぬるハ海のさゝ〻ハ深しうさ

英よ英　わるてうすく色もなく外形多くあるもの形さ

或云青よりみまりしいと云ハかさと云

貝なりと百貝ともかさとハ大よ別なり

貽貝　右十八　百貝圖ニハ蟹貝と云あり俗ニ又別よ貽貝あり紫貝黑貝と云

蚌類　こまいいがいとも声ゆるく云形ゆるく云ハかゆるく云いがいと云

蛤ハ大よ遠へ是此蛤よりる時ハ個州よ多く多のねだと云

外を云ハ志と奔ごし　西洋の海よりる時ハ阿貝のはかのび

云ハ蛤ハ貝と云べし　蜆ハ中乃高殊を

ゆゑ〻と云意なるべし　さゝ〻ども真珠ハ石決明より

出形なるもの形貽貝より出ずして生ずるゆゑ

謝考不考ゆゑ　和名ゆゑ云い貝ハまるまきうもく横よ

出さ外形多く白くさゝげあり

右の六く貝合和おとて世よ称るものを俗と称と

蛤ハ別よ叫れくゝ下考よの法合せ又考べし

但馬竹野浦真圖

後歌仙分三十六種評

前歌仙の撰あり　れを雖てもの後撰人中ん撰ひ
なりを細かう再さいきを評ぜ　ハ後歌仙乃
序文よ見へう金書これ海を見るべし

もぐさ色分　左一　　歌仙よ同し
四もち桃分　右一　　歌仙よ同し
梅の花分　左二　　歌仙よ同し
花分　右二

歌仙よハ櫻分をとりぐひとなぜ撰よ入ハ色ろ分と云
をあかり色を花分と云ものハ色ろの分ハ図の俗
ばらんの赤くいろある分を云ものを云べきや

櫻分　左三

桃類　うすと赤き分なりを色てるを和歌ゆく色分と云
みじかく小さ枝櫻分と云ぜ号よ合せり

海棠分　右三

桃類　みじかき茎の桃ゆく恰よちし春吹分と云ものの
小くさ花のくろさかすりあるを和歌ゆて云ぜ撰乃
図も是なりおなじ歌類の分ハ大よお違せり

いづれ狭是なるをもちゐ或説よまとか分ち極てを
紫前の色れ涙より出るを真とするゝ色の濃れたる
余未そゝふ不佞

ふしたか分 左四　ちよ編どろがごゝ

いろ分 右四

ちよ器もろハ舟貝とお紙よ云ふの〳〵赤さ色ゐ表
ものを云なるべゝ又なでゝこ分のやゝふも又白和ゐ云ハ
横分の横よ出きを色分と云ひ方是ゝ有るべゝ

からの分 左五　お紙よ図ゝ

みやこ分 右五　お紙よ図ゝ

うゝ赤分 左六　お紙よ図ゝ

さたべ 右六　お紙よ図ゝ

むらさた分 左七

ひ器ハお紙よちゞひさゝら分の方なるべゝさら分の
ち前の百貝れ中よ編どゞ

ちゝ分 右七　お紙よ図ゝ

なでしこ分 左八　お紙よ図ゝ

流ゐのゝハ 右八　お紙よ図ゝ

さゝもゝさ分 左九

あまこハ和ゐ浦ゐゝさゞ流と云分なり百分の中よ流ゝ結る

ほくろ介　右九　百貝圖に塩貝塩津貝とも

蚌類　大なるいはし小介のうちに白くはやなし

一種和布の浦のくこゝろの介のごとくなれど櫻の

類なりて色黑く同色れ拠点阿弓

ふ多介　左十

蚌類　かさちゐれおとし　島介と同類ゆえ多るの方い

白くもにしかさのうへにあり多さ介ゆえ

もぐ免介　右十　おゑ紙に図し

いさや介　左十一　おゑ紙に図し

あこや介　右十一

蚌類　おゑ紙に入るものと後ゑ紙に入るものと畧お表せり

叶撰に入るハ和布のくきんちやく介と云ものに似いづれも

見なるものをもつぶにわこや介ハいかとべるゝ　あゝ

論もるがごとし　わこハ阿兒と尹海士の兒なるべし　介の名ハあつべ

あハび介　左十二　おゑ紙に図し

かゝ介　右十二　おゑ紙に図し

うたせ介　左十三　百貝圖に八代貝と云

櫻類　うづら介と云ものの形うちもぐゝあるくるち

うづらの生れどもかさもの拠文あるうもくゝ紀介し

要ハおゑ紙の中に評ス

こなし介　右十三

螺類　上出くて下ゆるやかなり色あいさく
あきどろ地白く黄赤さるさが多し　按ずるに
このなる介をよみしあなるべし　後ろ強て一称の
介れ名とせし歟

あさり介　左四　百貝圖に白貝と云恐くハ誤なるべし
又高濱貝と云ものこれ歟

蛤類　色薄ゐ仮ハ淡く　按ずるに紋ハ淡く
紀伊より多く出るもまごりと同じく瓷用有り周ゆ
色薄ゐより文いろく面白さものを大小好みを使て

ちか介　右十四

蛤類　小介ゆゑ大なるハいまだ見ず色白く紋ゆゑし稀ゆ
紋ゆるもあるもかし也ごとくるやくなる介ゆゑ多くを
拾あり介　左十五　おなじ仮ゆ同し

かくれ介　右十五

おなじ仮ゆ云ハ介と同拾ゆ
ものゆ同じ是ハ未考

あしらい　左十六

蚌類　和名抄云いよすごきと云介ゆゑ
形ゆ似くもごゑ地うもを黄ゆこいうきの芽れやうなる
文ゆり色やゆ介なり小きハかし大なハ多くを介ゆゑ

みぎ分　右十六　おゝ紙ゝ同し
ゝゆぐ分　左十七　おゝ紙ゝ同し
ちぐみ分　右十七　おゝ紙ゝ同し
小分　左十八　おゝ紙ゝ同し
ちくさ分　右十八　おゝ紙ゝ同し

以上後鈔紙三十六品の評なり　古鈔紙合数、
又るゝ後鈔紙の名を要し　以擬と用べきものゝ
前鈔紙より九種　後鈔紙より九種　合十八種別乃
貝あり是ハ名も分を別なり

三十六の内前後とゝも同じ名あるもの二十
七種　其の種ども同名異物のもの七種中ゝ
所謂古鈔分数ゝなれば五十二種みゝ二十種ハ
同名同物なり
始の分名高百二小鈔紙五十二種入れ
百五十四種あるゝ余が見聞の貝面ぬ不来
ゝ及ものハ追加ゝ記べし

源氏分配當用語

桐壺　月分
空蟬　女名　又せみかたゝ
若紫　うゑ分　或ちゞめ分
紅葉賀　ちみち分　一名かゝ分
葵　女名
花散里　かゝぎた
明石　ゝきれ分
蓬生　めぢつゞ

幣木　ち分
夕顔　ち分
末摘花　ばに分　一名ばでしこ
花宴　ちゞり橘分
榊　たこ分
須磨　ちつき分
澪標　らの爪
関屋　ちゞ

絵合　たかゆき
薄雲　女名
乙女　めくハゞや
初音　うぐひす分
雲　女名
篝火　色分
行幸　山吹分
藤袴　うぢ分
真木柱　ふぢのうぐ
梅枝　うぐ
藤裏葉　うぐ
若菜下　甲分

松風　女名
朝顔　女名
玉鬘　女名
胡蝶　蝶分
螢　女名　又蛍分
蛍兵　ちゞり分
菊　女名
梅枝　ちつき分
藤裏葉　ひめちゞれ
若菜上　つゞめ分
柏木

撰笛　たけのこ介
夕貴　牛角介
幻　きせるこ介
竹川　玉貝
橋姫　玉つばた
絵角　かた
窓貴末　うり介
浮舟　舟介
白習　まさご介

以上五十四種　以中字紙より入るの七種を抜き
以下七種は百貝の中より評判を

玲瓏　まんりん介
南法　本蛤介
白宮　せきさる
紅梅　百に舟介
推古　ちのはこ介
子顔　まるうり　蛇こ
東屋　くりや介
蜻蛉　らんぎく介
美濃橋　ぶたく介

新撰六歌仙介

歌仙の中まて介あまの介のあとも又えび
ねそくハかすみまて　袖介　船介　孫介　鳥介　四種ハ
引ようくうあへて　花介　きど介　ハこ　海よろし　うく　孫だ
あまを除引　歌仙　能かけ　人　四種　よせ　介　うる介の
二つ　古歌　あまバ　合て　六歌仙の　数　なり　今　左　記

左一　蟬介　　読人不知

蟬介の　ものとまけど　村松の　葉　介　流の　雷　聞　う

右一　みる介　　読人不知

おもふ　うらぶ　ひ　みて　ちさの　海　れ　捨　びの　浦　よ　ば　も　面　ぬ　べ

左二　袖分　西行

浦あらし衣乃浦の袖ぐいは玉ひろふ風のたゝぬなりけり

右二　烏分　西行

山家集

波よるなぎさ〳〵の濱ぢかゝすゐ拾ひやもくもあるらん

左三　船分　人丸

大本集

さゝぐ人もあるきさふよする舟ゐいかるる風やはすぐなるん

右三　磯分

月　海人の玉よ海ぐまるい拾ぐいのかゝ玉のこゝろ〳〵ハ左ふつ

貝盡浦之錦上終